



TITLE:

人格主義の立場に於ける經濟と人生の一考察(一)

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 人格主義の立場に於ける經濟と人生の一考察(一). 經濟論叢
1920, 10(6): 794-812

ISSUE DATE:

1920-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127668>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷十第

行發日一月六年九正大

論 說

財産税の利弊

法學博士

神戸 正雄

鎌倉時代の家族制度(五)

文學博士

三浦 周行

Jan de Witt に就て(一・完)

法學博士

財部 静治

龔自珍の農宗說

文學士

小島 祐馬

明治の米價調節(七、完)

法學士

本庄 榮治郎

人格主義の立場に於ける經濟と人生の考察(一)

法學士

石川 興二

時事問題

目下の恐慌及び失業

法學博士

戸田 海市

恐慌の對策と銀行業者

法學士

大森 研造

雜 錄

北米合衆國に於ける農耕地

法學博士
農學博士

高岡 熊雄

沙見法學士に答ふ

法學博士

武藤 山治

經濟生活の道德化

法學博士

神戸 正雄

古代に於ける植民史訓

法學博士

山本 美越乃

附錄

本誌第十卷總目錄

人格主義の立場に於ける經濟と人生の一考察(一)

石 川 興 二

一 經濟生活及組織の理想條件の必要と

「經濟と人生」

經濟組織の改造を如何にすべきかと云ふことは、現代の最逼迫した最重要なる問題であることは云ふまでもない、其學問的研究を社會問題論と呼ぶも、社會政策と呼ぶも又經濟政策と呼ぶも其研究の本質に至つては等しく一である。即ち其等のものは要するに人爲を以て經濟生活及組織の自然の成り行きを左右して、之に或一定の方向をせらしめ、理想的なる經濟生活及組織を現實せしめんとする研究である。故に、此研究に當つては我々は必ず第一に理想的經濟生活及組織の條件又は標準なるものを知らねばならぬ。即ち此標準より見て現在の經濟狀態を批判してそれが不可なる時に改造の必要が起り、而して此標準に適合する或狀態を理想的經濟狀態とし、然る後現狀を導きて此理想狀態に到達せんとする方策が起る。余は嘗て本誌に於て、主として經濟原論の認識方法に就きて論じ、總ての認識は價值判斷であり、從て學的認識には常に確固たる價值標準の存せねばならぬことを力説したが、殆ど總てが明かに價值判斷である政策的研究に於て、價值標準を要するは一層明かである。勿論、此價值標準と云ふものを、所謂理想社會と云ふものと

1) 本法、第十卷第四號「經濟學不進歩の原因に就きて」

混同してはならぬ、理想社會とは、此價值標準より見て是認せられたものを云ふのである。今日まで社會問題論に於て、此價值標準により理想的なりとされた具體的な理想狀態又は社會と、此具體的狀態を理想的なりとする形式的な價值標準とが充分に區別せられてゐないことが少くないやうである。余は之を充分に區別して考へたいのである。

今之を社會問題研究者の事實に見るに、第一に屢々此價值標準となるべきもの、確立が無視されて居り、第二に假令確立されてゐても、それが學問的に批判的に確立されたるものでないことが少くない。斯くの如く此價值標準が確立してゐない限り認識と云ふことをそれ自身が既に學問的には成立し得ない、又價值標準が確立してゐても其が學問的に正しきものでなければ、此價值標準による社會問題の研究の成果は總て學問的に正しきものたることは出来ぬ。余は曩には主として原論に就き其不進歩の最大原因は其認識論的誤謬にあることを論じたが、政策的問題に就いても全く同様に云ふことが出来るのである。されば現代の社會問題又は社會政策の研究が學問的價值を有するが爲めには、我々は必ず學問的に正しき此價值標準の確立に努めねばならぬ。否經濟學の總ては結局理想的經濟生活の現實を其終局の目的としてゐるものであるから、此價值標準の問題は經濟學全體の重要問題なのである即ちそれは經濟原論及經濟史の研究の立場を定むるに重大な關係を有するのである。然し茲には先づ論を政策論的方面に限つて置き他は後に譲る事とする。

而も此價值標準は、倫理學上の價值標準とは別のものである。倫理的の價值標準は、それが直に經濟政策の價值標準たるには餘りに縁が遠い、經濟政策論に於ては別に斯々の條件に適合する經

濟生活及組織が理想的のものであると云ふ、經濟的理想に對するそれ自身の條件即ち價值標準がなければならぬのである。而して此ことは本論に入つて明かにするが如く、人格主義の立場に立つ時に於て殊に然か云ひ得るのである。

然るに此標準を知らんとすれば我々は必ず「人生と經濟」その關係を考慮しなければならぬ。何となれば、理想的なる經濟生活又は組織なるものは、最望しき人生の現實に最好都合なる經濟狀態又は組織であり、從て其は經濟と人生との關係を如何に考へるかに依つて定まるからである。

然るに「經濟と人生」その關係は、一方、其「人生」を如何に考ふるかに依つて異つて來る、例へば其を快樂主義的に考へるか人格主義的に考へるかと云ふが如くである。而して他方又其「經濟」を如何に考ふるかに依りて異つて來る。即ち經濟生活及組織なるものは普通に考へらるゝが如く、其調達をそが本來の目的とするところの富を介してのみ人生に結ばるゝものではなく、更に此富を介せずしてそれ自身直接に人生に結ばれてゐるものであるが故に、其「經濟」と云ふことを、單に「富と人生」その一面の關係と考へるか、或は「富と人生」並に「經濟組織それ自身と人生」その二面の關係と考へるかに依つて、經濟と人生との關係は又異なることとなるからである。

於茲、理想的經濟生活及組織の眞に正しき條件を知らんが爲めには、其根本に溯つて、正しく打立てゝ行かねばならぬことは明である。

即ち本論文が其全般に亘り目的とする所は、一方「人生」を他方「經濟」を右の如くに異りて考へるに依り「人生と經濟」の關係は如何に異つて考へらるゝこととなるか、更に「人生と經濟」の關係

を斯く異つて考へるに從て「經濟生活及組織の理想條件又は標準」は如何に異つて考へらるゝこととなるかと云ふ、其等のものゝ相互の間に於ける密接なる關連である。而して本論文が其中心の論點とするところは「經濟生活及組織の正しき理想條件」を得るが爲めには「人生」を如何に考へ、又「經濟」を如何に考ふべきか、而して此正しき「人生」並に「經濟」の考へ方に於ては「人生と經濟」の關係は如何様に考へらるべきであるか、更に又此「人生と經濟」の考へ方に於ては「理想的經濟組織の正しき條件」は如何に考へらるゝこととなるかと云ふことである。

即ち此論文の目的は、「人生」そのもの、「經濟」そのもの、「經濟と人生」そのもの又は「經濟生活及組織の理想條件」そのものを詳しく論じやうとするのではなく、寧ろ之等のものゝ考へ方及其相互の關係を考察せんとするものである。我々は今日まで、或ことを考へると云ふことは之を重じたが、「考へ方を考へる」と云ふことは餘り重要なことも考へず又餘り興味も持たなかつた、然し近世の賢者ベーコンが其著 *Novum Organum* に於て學問の研究方法につき「神は世界創造の第一日を總て光を造ることに用ゐた如く、我々は先づ果實よりも光を與ふべき axioms を求めねばならぬ、axioms を得れば其光によつて果實は豊富に得らることとなる」と云ふ意を述べてゐるやうに、我々は總ての研究に於て先づこの axioms たる考へ方を考へねばならぬ。現代社會問題にとつて最重要なる上述の價值標準も亦、其正しき考へ方が定まつて後に初めて正しく確立せらるべきものである。勿論斯の問題は非才なる余の今充分に論じ得やうなどとは思ひも寄らぬところであるが、然し之等の點に關し幾分自己の考へてゐるところを述べ識者の教へを受くる

と云ふことも亦許さるゝことであると思ふ。

而して正しき理想的條件に到達すべき正しき考へ方は、正しき人生觀たる人格主義の立場に立ちて初めて得らるべきものなるが故に、本論の中心的論點は、人格主義の立場に於ける「經濟と人生」の考へ方にある。然し今日まで經濟學者の理想論の中核を成した人生觀は、經濟學に最縁深かりし功利主義的又は快樂的人生觀で、人格主義とは全く反對なるものである。故に人格主義の立場の論に入る前提としての意味に於て、先づ功利主義の立場に於て、上述の諸論點を極めて大體に於て一瞥しようと思ふ。

而して茲に尙一言したいことは嘗ても云ふた様に、久しき人類の自然科學全盛時代が我々を閉籠めし誤つた偏狹な分科主義の城壁に立て籠てはならないと云ふことである。本來人間の智識は一體となつて始めて充分に役立つものである、正しき分科主義は認識目的が各の學問に特有なることにあつて、此認識目的を達する爲めに各の學問の利用する智識の範圍に於て犯す可らざる限界があることにあるのではない。我々は其必要とする智識を總ての學問に借つて始めて其研究が學問的となる。殊に斯る問題に於て其人生觀に關しては多く哲學に其教を仰かねばならぬ。

二 功利主義の立場に於ける『經濟と人生』の一瞥

經濟生活及組織の正しき理想條件を知らんとするが爲めには、先づ一方「人生」に就きて今日までの經濟政策又は社會問題論の功利主義的人生觀を全然脱却し、他方「經濟」に就きて、其考察を

「富と人生」の關係にのみ限る半面觀を排除することが第一に必要である。依つて余は茲に此功利主義の立場に立つて諸の問題に一瞥を與へて、人格主義の立場に於ける後の論に對照の材料を用意すると共に、此二の謬見の排除に努め以て人格主義の立場に入る階梯を作ることとする。

先づ之が爲めに經濟學の功利主義の深き因縁に一瞥を向ける。勿論功利主義と經濟學と云ふ廣大な問題は別に論すべきものであつて、茲に問題とせんとするところではない。茲には人格主義の立場に進む前提として、只其一端に觸れるのみであることを特に斷つて置く。

近世經濟學の郷土たる歐洲近世の思想は哲學上三種の時代に分つて考へられる、即ち、啓蒙思想時代、理想主義時代、浪漫主義時代、即ち之である。而して今日までの經濟學は啓蒙思想と離る可らざる深き因縁を有してゐるのである。近世の啓蒙思想の全盛期は十八世紀と、十九世紀の後半期との兩時期である。而してそれは文藝復興期より次第に發展して行つたのであるが、近世の經濟學も亦此文藝復興期に其源を發し、次第に其空氣の中に發達して行つたのである。而して此啓蒙思想が先づ其極點に達した十八世紀は、經濟學の父とも云はるゝ、アダム・スミスが生存してゐた時で、經濟學の經典とも云ふべき其著「富國論」は此千七百七十六年に出版せられたのである。又經濟學に深き哲學的基礎を與へ、十九世紀の初めに起り來る英國經濟學者の色調を定め、又永く經濟學を支配することゝなつた、彼のベンザムの哲學思想は云ふまでもなく啓蒙思想たる功利説であつた。之等は十八世紀の啓蒙思想に屬すべき人であるが、舊派の經濟學を集大成し永く後世に範を垂れしミルはまた十九世紀の啓蒙思想の哲學者である。之等の人々は所謂正統學派の經

濟學の巨星であるが、今日の經濟學は皆其根底に於て等しく此正統學派を繼承してゐるものである。加之彼の正統學派に反對して立つた云はるゝ社會主義學派なるものも亦同様に、啓蒙思想の根柢に養はれてゐるのである、殊に其最偉大なる代表者であり、又科學的社會主義の建設者と云はるゝマルクスは實にヘーゲルの左黨より出で、此十九世紀の啓蒙思想たる實證主義となつた人である。即ち所謂科學的社會主義派の人々が如何に正統學派を非難しても、彼等も亦其根底の哲學に於ては正統學派と同じく啓蒙思想に發してゐるのである。さらば歴史派は如何と云ふに、そも亦其根本に於ては正統學派に従ふものであつて、從て其根本思想は同じく啓蒙思想であり、只だ之に幾分理想主義を加味したに過ぎない。

斯くまで深く經濟學に喰ひ入りし啓蒙思想なるものは、然らば如何なるものであるか。それは先づ人を個人主觀と考へ、感覺と自然科學的理解力とより成るものと考へる、從て啓蒙主義の倫理學は當然に感覺と理解力とに立つ功利主義となる、即ち善惡の標準は快樂であつて、最大多數の最大幸福が最上善であることとなる、即ち一方では感覺主義であるが他方では悟性的である。此啓蒙思想の主觀の考へが、一方感覺的に専ら快樂を求め苦痛を避け、他方悟性的に全々合理主義に依りて動くところの經濟學に於けるかの經濟人と全々一致してゐることは如何にも興味深いことであり、之又經濟學に對して啓蒙思想が如何に深き關係を有するかを教ふる一體である。

而して又啓蒙思想は更に客觀に就いては自然科學的對象を實在と考へるのである、故に啓蒙思想の認識論は當然模寫主義となり、物を知るとは此主觀が此外界の實在を模寫することであり、

2) 西田幾太郎博士著現代に於ける理想主義の哲學 81 頁

3) 西田幾太郎博士著現代に於ける理想主義の哲學 第 62-3 頁

真理とは此主觀の思想と外界の實在との一致であることゝなるのである。

斯くの如くにして多くの經濟學の研究及今日の多くの社會問題論の研究が、其認識方法に於ては余が嘗て本誌に於て述べし如くに、最多く模寫主義的の誤謬に陥ると共に、其人生觀に於て功利主義又は快樂説から脱し得ないことは洵に當然のことなのである。我々は此點を深く考へて見る程大なる興味を覺え又大なる利益を得るのである。

されば、余が嘗て經濟學は其眞の進歩の爲めに、認識觀念に於て模寫主義的誤謬より脱することが何よりも重要であると述べしと同じ程度に於て、經濟學は其人生觀に於て功利説又は快樂説的誤謬より脱することが甚だ必要なのである。殊に此必要は社會問題の研究に於て最も大なのである。是社會問題の研究の中心をなす理想的經濟生活又は組織とは、先にも述し如く最正しき人生を現實するに、最も適合する經濟組織と云ふことであるからである。故に此人生を誤つて居る限り我々は理想的經濟組織の如何なるものたるかを學問的には初めより知ることは出來ぬ。而して又誤れる人生觀に立つ社會問題論は總て徒勞に歸せざるを得ないからである。然らば斯くまで根深き功利主義的誤謬より完全に脱却し、誤れる人生と經濟との關係の考を少しも加へないと云ふことは如何にしてなし能ふであらうか。

抑々、哲學上明かに誤謬たる功利説の要素が、尙經濟學及社會問題論の中に存してゐると云ふことは、多くはそが人格主義の人生觀と云ふ正しき觀念の陰に隠れてゐるが爲めである。故に、我々は純然たる快樂説の見地に立つて、純粹に功利主義的なる經濟理想論を發展せしめ、斯くし

て現代社會問題論中に潜める功利主義的要素を、其亦裸々なる姿に於て暴露闡明し、正しき立場よりの考察の際に當り此闡明されし功利主義的要素の再び之に混入するを避けることを要する。

依つて余は次段に於ける人格主義の立場よりの考察の準備として先づ純然たる功利主義の立場に立ちて、極めて大體に於て人生と經濟との關係を考へ、又其立場に於ける理想的經濟組織の條件を純粹に發展せしめ、更に斯くして明瞭になりし理想條件の缺點を指摘し、以て誤れる功利主義の立場を全然排除したいと思ふ。而して之が爲めには先づ余は快樂説又は功利主義の主張より見て行かねばならぬ。

(A) 即ち由來經濟學の人生觀とも云ふべき、功利説又は快樂説の主張の骨子は次の如くである。⁴⁾

「我々が深く自己の中に省みると意志は凡て苦樂の感情より生ずるので、快を求め不快を避ける」と云ふのが人情の自然で動かす可らざる事實である。我々が表面上全く快樂の爲めにせざる行爲例へば身を殺して仁をなすと云ふが如き場合にても、其裡面に就いて探つて見るとやはり一種の快樂を求めて居るのである、意志の目的は畢竟快樂の外なく、我々が快樂を以て人生の目的となすと云ふことは更に説明を要しない自明の眞理である⁵⁾。故に、快樂が人生唯一の目的であり最大なる快樂が最大の善であると主張するのが本説の根本思想である。而して快樂説には自己の快樂を以て最上の善となす利己的快樂説と、社會公衆の快樂を以て最上の善となす公衆的快樂説即ち功利説とがある。ベンサムは即ち此功利説の完全なる代表者である、而して氏に従へば「如何なる快樂も同一であつて快樂には種類の差別はない *pushpin* の快樂も高尚なる詩歌の快樂も同一であ

4) 西田幾多郎博士善の研究173-6頁參照

5) 同173頁

る只大小の數量的差異あるのみである」而して快樂の數量は、快樂の強度、長短、確實、不確實、等の標準に依り計算が出来ると考へ、其方法をも論じた、而して氏は個人の最大幸福よりも、多數人の最大幸福が快樂說の原則よりして、道理上一層大なる快樂と考へねばならぬから、最大多數の最大幸福と云ふのが最上の善であると云ふのである。

(B)次に此主張の立場に立つて人生と經濟との關係及理想的經濟組織の條件の極めて大體を考へ同時に「人生と經濟」とを單に「富と人生」と考へる半面觀を排除しよう。

此立場に於ては、云ふまでもなく人間の理想生活は、最大の快樂を享受する生活狀態であり、理想社會とは其社會の人員が全體として最大なる快樂を享受しつゝある社會であると云ふことゝなるのである。

(a)次に「經濟と人生」との關係に就き「富の人生」に對する意義は云ふまでもなく、富が直接、間接に人に快感を與へると云ふことである。何となれば此立場に於ては快樂が人生唯一の價值であり、從て人生に價值あり意義あると云ふことは、常に人の快樂に功獻すると云ふことであるからである。逆に、不足の感情と之を満さんとする願望との結合せるものたる所謂欲望なるものは、之を満足せしむる時は總て快感が起り得るが故に、此立場に於ては、此欲望を充し得るものは總て人生に有用なるもの即ち財又は富となる譯である。之が又今日尙經濟學上に最も多く用ゐらるゝ財及欲望の定義である。

而して「人生と經濟」との關係の考察を單に「富と人生」の關係にのみ限る時には、功利說の立場

に於ける理想的經濟組織の標準は、正にフックスが彼の經濟原論の中に國民經濟の使命を論ぜし所に述べし左の句の如くである、即ち「其欲望の何たるを問はず社會全員の欲望を、經濟財を以て出來得る限り完全に満足せしむること、更に詳しく云へば現存せる欲望の満足のみならず新しき欲望の發達を計ること、即ち斯くして全員の欲望の満足を増大すること」⁷⁾即ち「可能的最大なる欲望満足」斯くの如きが理想的經濟組織の條件である。即ち功利主義に於ては最大多數の最大快樂が善であり、「人生と富」その關係のみに就いて見れば正に此條件がこを與へるものだからである。

然し之だけで尙、眞に最大なる快樂を與へるものとは云へぬのである、何となれば、其は「經濟と人生」その二面の關係の中「富と人生」その關係、換言せば富を介したところの「經濟と人生」その關係のみを見てゐて尙他の一面「經濟生活及組織そのものと人生」の關係、即ち富を介せざるところの「經濟と人生」その關係を明かに見てゐないからである。

b) 「富と人生」その關係の外に更に「經濟生活及組織そのものと人生」の關係をも考慮する立場に立ち而も功利主義の立場に於て經濟組織の理想標準を最も剴切に云ひあらはせるは、キャナンの「The economic ideal for the world at large is the greatest possible human material welfare」(社會全體に對する經濟的理想は可能的最大なる物的幸福なり)⁸⁾と云ふ一句である。此は一見フックスの前掲の語又は其語に續ける「die möglichst vollstandige Befriedigung」(可能的最大の欲望満足)と云へる句と何等變りなく思はるゝが、其實はこれとは全く異なる立場に立つて云ひあらはされたもので全く意味を異にしたものである。何となればここに彼が「material welfare」(物的幸福)と

7) Fuchs; Volkswirtschaftslehre S. 20.

8) Cannan; Economic outlook 272

云へるもの或は彼がこれと同一の意味に於て用ふる wealth なる語は、普通に用ゐらるゝ意味とは全然異なつて “satisfaction minus dissatisfaction” (満足より苦痛を捺除せしもの) と云ふ意味であり、而してこの dissatisfaction (苦痛) とは “the pain and irk some toil involved in the creation of the positive utility or satisfaction” (積極的満足の作出に伴ふ嫌な骨折及苦痛) であるからである。即ち茲氏が經濟組織の理想標準とせし the greatest possible human material welfare (可能的最大なる人類の物的幸福) と云へる前述の語は云ひ換へれば the greatest possible human positive satisfaction (人類の積極的満足の可能的最大) にして且 the least possible pain and irk some toil involved in the creation of the positive utility or satisfaction (積極的満足を作るに伴ふ嫌な骨折及苦痛の可能的最小) であること云ふことである。即ち氏はこの二つの條件を併せ有するものが眞に經濟的理想標準であると云ふのである。詳しく云へばこの二條件の中前者即ち可能的最大の積極的満足と云ふがフツクスの可能的最大の欲望満足と云へるものであり、富自身より人が享る満足の最大なることであつて余の所謂「富と人生」その關係を見たものである。而して後者即ち積極的満足の作出に伴ふ嫌な骨折及苦痛と云へるは、余の所謂「經濟生活又は組織そのものと人生」直接の關係を見たものである。而してキヤナンの此眞意を更に右衍すれば次の如くである。即ち假令或經濟生活又は組織が、例は機械的生產方法なるものが非常に多くの富を産出し従て此多量の富に依り多くの満足を人類に與へたとするも、若し其經濟生活又は組織即ちこの機械的生活方法なるものが此中に働く人々に直接、非常な苦痛を與へるとするならば、其經濟生活又は組織なるもの

は、それが富により與へる快とを直接に與へる苦痛とを差引き結局大なる快樂を人類に與へるものと云ふことは出來ぬ。於茲眞に理想的なる標準は、單に富の人類に與ふる満足即ち余の所謂「富と人生」との關係のみでなく、經濟生活又は組織そのものが直接人生に與へる苦痛即ち余の所謂「經濟生活及組織そのものと人生」の關係を考慮したものでなければならぬ。彼は經濟的理想は一人當の最大所得に非ずと特に言してゐる。¹⁰⁾

於茲功利主義の立場に於て、眞に理想的なる經濟生活及組織の條件なるものは、それが結果する富に依りて人に最大の欲望満足と與ふるのみならず、更にそれ自身が直接人に與ふる苦痛の最小なるものでなければならぬ。

彼の次の語はこの點に關して甚だ興味あるものであり且この事を一層明にすると利益があると思ふ。即ちその意は以下の如くである、十八世紀の初期より始まり文學上政治上に於ける民主的傾向は積極的の満足の作出に伴ふ苦痛及困難(余の所謂「經濟生活又は組織そのものと人生」との關係を考慮に入るに至らしめた。即ちアダム・スミス以前の多くの經濟學者は、又其後に於ても或者は國民の利益を考ふるに、勞働者階級の利益を除外視したのである、然るに生産に伴ふ苦痛なるものは此階級の者に主として落るのであるから、之等の經濟學者は富の獲得に伴ふ國民への苦痛を全く考慮に入れなかつたのである、勞働者階級が十時間働くべきか又は十六時間働くべきかと云ふことは専ら何れが多く財貨を産出するか(余の所謂「富と人生」との關係)と云ふことのみによつて決定せられた、然るに最近の經濟學者は、一定量の積極的満足を享け而して日に十時間

働く人々の經濟狀態を、同量の積極的満足¹¹⁾を享け、而して其を得る爲めに十六時間働く人々の經濟狀態よりも優れりとするのである、と云ふてゐる。而して又氏は事實個人の富を明かにするに、其人が其所得を得る爲に受るところの "disagreeableness" (不快) 及び "agreeableness" を考慮してゐる。

以上説き來りし「經濟と人生」の両面の考察は、キャナン自身も云へるが如く、勿論彼一人の主張ではない最近に至る程多くの學者の注目するところである。然し我々は「經濟と人生」と云ふ時は常識に於て單に「富と人生」との關係のみを普通考へ勝なのであるから、理想的なる經濟組織と云ふ時にも單に「富と人生」との關係のみを考へ人生に最好都合なる富を結果するに適するものかそれであると考へ勝である。從てまたキャナンが過去の時代の學者について指摘したが如く、今日に於ても多くの學者がかく考へ勝なのである。單に抽象的に論じ來ればこのことは單に理論的の興味を有するものにして實際、社會問題の研究等には重大なる關係を有せざるが如くなるも事實上に於ては決してそうでない、先にも述べし如く、現代經濟生活の中心たる機械的生産と云ふことに就いてもその善惡を單に「富と人生」の關係の立場に於て考ふれば、機械的生産なるものは非常に僅少なる生産費によりて非常に大なる富を與へるものであるから最もよいものとなる。然るに更に「經濟生活又は組織そのものと人生」との關係に立つて考ふれば、或は機械的生産はその中に働く人々に大なる苦痛を與へるのであるから、假令大なる富を結果するも、尙不可なるものであると云ふ判斷をもち得る譯となる。故に「經濟と人生」その關係を單に「富と人生」その關係と考

11) Caanan; Weath. pp. 12-13

へるか、更に「經濟生活及組織そのものと人生の關係をも併せ考ふるか」と云ふ事は研究上大なる差異を生ずることとなるのである。故に我々は此點を明確に意識し又た慎重に考へなければならぬ。斯くて經濟生活及び組織の正しき批判は單に「富と人生」との關係のみならず更に經濟組織そのものと人生との關係を考慮したる時始めてなし得るものなることを十分に注意せねばならぬ。

勿論快樂説の立場に於ては、其價值標準は常に只快不快と云ふ單簡なことであるが故に「經濟生活又は組織そのものと人生」との關係も頗る簡單であつてそれはキャナンの語に明に見らるゝか如く單にそが pleasure (快)を與へるか pain (不快)を與へるかと云ふ問題である。而してこの立場に於ては經濟生活の求むるところは總て pleasure であり出費は總て pain であるから經濟生活其のものが直接人生に與ふる pain も亦同じく出費と看做して net pleasure (純快樂)を知る前に排除すればよいのである。されば功利主義の立場に於ては經濟の理想標準をフックスの如くに云ふも亦キャナンの如くに云ふも未だ大した差異がないとも云へる。然し一度人格主義の立場に立つ時は決してそうは云へぬ、この立場に於ては人格の發展と云ふことが只一の價值標準である、而してこの人格の發展と云ふことがすでに快不快と云ふが如きことは遙に複雑なことである、故に富と人生との關係が、功利主義の立場に於けるよりも遙に複雑となると共に、「經濟組織其のものと人生」との關係も亦遙に複雑となる、従て人生に最適當なる富を結果する經濟生活又は組織が最好適なるものであると云ふことは非常な不完全なこととなる、故に人格主義の立場に於ては必ず「經濟組織又は生活其のものが人生」に及ぼす影響を、重大なる意義に於て考慮しなければならぬ。

のである。従つてキャナン等のの人々が理想的經濟組織の條件に就き「經濟生活又は組織其ものが人生」に及ぼす影響に特に明確に我々の注意を向けしめたる意義は、人格主義の立場に於て愈々大となるのである。此ことは後に人格主義の立場に立つた時に一層明かに立證することとする。

然し又他方キャナンが 'agreeableness' 及び 'disagreeableness' 又は 'the pain and irksome toil involved in the creation of positive utility or satisfaction. を考慮すべし' 又明かに 'pain and pleasure の對立を考へし' 而して 'satisfaction minus dissatisfaction' となして快不快に就き完全なる數量的關係を考へて全く質的差別を無視せしむ、又 'the greatest possible human material welfare' として最大多數の最大幸福なるベンザムの語に對照する所は彼の經濟學及社會問題論の人生觀が純然たる功利説なることを明示して餘りあるところである。於茲我々は現代英國第一流の經濟學者に依つて斯くも大膽なる功利説が、今尙遵奉されてゐることに少からず驚き、又如何に經濟學にとりて功利説の病根の根深きかを教へられ、更に又如何に功利説的謬根の完全なる除去の努力が、現代經濟學にとりて尙必要であるかを切に思はしめらるゝのである。

(C) 諸我々はすでに功利主義の立場を知り、其立場に於ける理想的經濟組織の條件を明かにしたから次に我々は此功利主義的立場の誤謬なることを指摘して、永き經濟學の禍根を斷たねばならぬ。但し茲には其主たる誤謬の一二を擧げるに止めて置く。

第一、事實上何人にも明かなるが如く、功利主義の價值標準は事實上適用することが出来ぬと云ふことである。何となれば事實上に於て各種の不快 (pain) や快 (pleasure) は各々品質上の差異を有してゐるものであるから、功利主義の云ふ様に之を加減して如何なる社會が純快樂の最大量と與

へる最理想的なるものなるかを決定することは出来ぬ。

第二に此社會問題研究の學問的基礎となるべき人生の理想の何なりやと云ふことは、經濟學者の任意に決し得る所でなく、此こそを其學的職分とする倫理學に就きて知らねばならぬのであるが、而も功利説なるものは倫理學上明かに許し得ざる誤謬なのである、即ち其根本原理は前述せし如く、人は如何なる場合に於ても快樂を求めて行動し、快樂が人生唯一の目的である、故に快樂を與ふるものが善であり、最大の快樂を與ふるものが最大の善であると云ふのであるが、然し少しく考へて見ると之は決して真理でないことが明かである、人間は常に快樂を求めてゐるのではない、快樂は人の欲求の現實に必ず伴ふ満足の感情である、欲求の現實と云ふことが、如何なる人も如何なる場合にでも求めてゐる所なのである、而して最深なる欲求の現實即ち理想を現實せんが爲めには、如何なる苦痛を受けても自己の身を失うても顧みないと云ふやうな考へは、誰の胸裡にでも潜み居る所なのである。時に依つて此動機が非常な力を現はし來り、人をして思はず悲惨なる犠牲的行爲を敢へてせしむるのである、快樂論者の云ふ様に、人間が全然自己の快樂を求めて居ると云ふのは頗る穿ち得たる真理の様であるが反て事實は違つたものである我々經濟學者は此點に就き倫理學に特に耳傾けなければならぬ。

第三に特に注意しなければならぬのは快樂説又は功利説の立場に立てば、經濟生活自身が又引ては人生々活其ものが矛盾に陥らざるを得ないと云ふことである。即ち前述の如くに快樂説の立場に忠實である以上快樂は如何なる快樂も皆同品質同價值であつて只數量的差異あるのみでなければならぬ、若し快樂に性質的差別があつて之に依つて價值が異なるものであるとするとすれば、快

樂以外に別に價值を定むる原則を許さねばならぬこととなる、即ち快樂が行為の價值を定むる唯一の原則であると云ふ（本説の根本）主義と衝突する、故に例ば亞片を喫む快樂も酒を飲む快樂も、詩歌を歌ふ快樂も、善を爲すの快樂も、全く同一の價值を以て善である。之が功利説又は快樂説の絶對的特徴であると共に又根本的の缺點である。

即ち於茲功利説の所謂最大多數の最大快樂を求めると云ふことは、マーシャルが其大著經濟原論に洵に適切に云へる次の語の如くなる、この語は經濟學の功利主義的病根を痛切に駁した經濟學の碩學の語として特に興味深く覺へるものである、*a rise in the standard of comfort;—a term that may suggest a mere increase of artificial wants among which perhaps the grosser wants may predominate.....Some writers however of our own and of earlier times.....have implied that a mere increase of wants tends to raise wages. But the only direct effect of an increase of wants is to make people more miserable than before.*¹²⁾ 即ち欲望の満足は等しく人に快樂を與へるものであるが、其欲望の満足と云ふものは其欲望次第により或は人の心身の力を増し或は之を害ふものである、然るに快樂説又は功利説の立場に於ては總ての欲望の満足は同一の價值として許されるのであり、而も普通快樂を求める爲の欲望の満足の中には、氏の云ふ如く、多くの野卑なとして其満足が人の心身の力を害ふべきものが、寧ろ主となつてゐる、故に其満足を増進すると云ふことは社會の多くの人々の心身の力を害ふこととなる、心身の力を害ふと云ふことは即ち人が道德生活に於ても、經濟的の生産能率に於ても衰退せざるを得ざることである。然るに、氏が明かに指摘せしが如く、單に欲望満足が勞働者の能率を増し、其賃銀を増加するか如くに云ふ過去及現在の學者は

12) Marshall; principles of Economics 7 Aufl, p. 690.

誤つてゐるのである。此實例は我々は殆ど枚擧に遑なきまでに見るのであり、我々が屢々之を誤れる勞働者の生活に於て見、又上流の子弟の無力の有力なる一原因として見る。更に大にしてはギリシヤ、ローマの末路に於けるが如く、多く物質文明の甚しき進歩が一國の衰亡する重大原因の一を成すことに於て見るのである。

即ち純然たる功利主義の立場に立つことは、人類進歩の源泉たる人類の活力を殺ぎ、從て重要な生産要素としての人の勞働力を害ふのみならず、更に經濟進歩の最大原因たる資本の増大、人智の進歩、企業組織の發達を害して、先づ經濟生活それ自身の目的が破れ社會の富が低下する、從て又結局人生の唯一の意義とする快樂それ自身の破滅に陥らざるを得ないのである、此ことは功利主義的立場の全く矛盾せるものなることを示すと共に、それが如何に不完全なるものなるかを事實に於て最有力に教ふるものである。

斯くの如くにして我々は功利説の立場に立つ限り、決して正しき經濟組織の理想條件を知ることとは出来ないのである。於茲我々は明確に經濟學の久しき又深き因習を捨て、快樂説の立場を完全に脱却し、最正しき人生觀に立ちて人生と經濟との關係を考察し、學問的研究の基礎たり得る經濟組織の理想的條件を決定せねばならぬ。

即ち我々は以上によりて「人生」に就き、功利主義に立つ可らざることを、「經濟」につき單に「富と人生」の半面觀に陥る可らざることを明にした、依つて余は進んで人格主義の立場に立ち又經濟の両面觀に立ちて、經濟と人生との關係を一層詳細に考察し、此立場に於ける經濟組織の理想的條件を明かにし、更に之等の論をなすに當り常に上に明かにせし功利主義の立場に於ける諸點と之を對照せしめ、一層その意義を明かにしようと思ふ。(未了)